様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２３７

研究課題名（和文）表現主義・保守革命・ナチズムにおける美学/政治の交差とその歴史/時間意識について

研究課題名（英文）The relation between aesthetics and politics and the view on history/temporality of Expressionism, conservative revolution and Nazism

研究代表者
石田　圭子（Ishida, Keiko）

神戸大学・国際文化学研究科・准教授

研究者番号：４０５２９９４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、表現主義、保守革命、ナチズムに共通する時間感覚に着目し、包括的な視点からこの時代の美学と政治の関係を考察することを目指した。本研究によって、モダニズム・保守革命・ナチズムは、それぞれ突然性ないし瞬間性といった歴史／時間感覚において接近しながらもなお相違点を有しているということが明らかになった。また、そうした時間感覚における揺らぎと反転において、当時の美学と政治の間に交錯が生まれた可能性も見出された。本研究の成果は発表や論文を通じて公表された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　歴史/時間への感覚という点から20世紀初頭ドイツにみられる美学と政治が交わる思考について明らかにしようと試みる本研究によって、モダニズムおよびドイツ美学研究の死角を照らし出すことができた。また、美と政治の連携のメカニズムの一端を解明することによって、本研究は政治における現在の危機、すなわち、世界のいたるところでナショナリズムや民族主義が噴出し、政治の世界で美や世界の再―表象化を求める動きが強く現れてきている危機にたいして、その危機の在処を指摘し批判しうるひとつの手がかりを提示しえたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the sense of time common to expressionism, the conservative revolution, and Nazism, and aimed to examine the relationship between aesthetics and politics in this period from a comprehensive perspective. This study reveals that modernism, conservative revolution, and Nazism have differences in the sense of time, while approaching each other in the sense of suddenness or immediacy. It was also found that the intersection of aesthetics and politics in that period could occur in such fluctuations and reversals in such sense of time. The results of this study have been published through presentations and papers.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：ファシズム　ナチズム　保守革命　表現主義　モダニズム　美学と政治　K・H・ボーラー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

ナチズムと唯美主義的モダニズムの結びつきは、これまでモダニズム研究の死角であり続けてきた。これに関連する各事象の個別研究はあっても、全体的な見通しを指摘しようとする傾向は見られなかった。近年ではナチズムや保守革命の研究の進展にともない、文化全体を包摂する観点から政治思想と美学を横断する研究も現れるなど状況も変わりつつあるが、考察対象を 1920～30 年代のドイツモダニズムに絞り、そこでの美学と政治の連絡を根本的次元で厳密かつ十分な考察を行なう包括的な研究はなされていなかった。本研究は、こうした欠落を補い、当時の美学と政治の交差について、ある包括的視点を見出すことを目指そうとするものであった。

## ２．研究の目的

１を背景に、本研究は 20 世紀初頭のドイツのモダニズム芸術と思想に見られる特異な歴史／時間意識に着目し、そこから当時の美学と政治の交差について明らかにすることを目的とした。その歴史／時間意識とは、アルカイックなものと「現在時」を結びつけるベンヤミンの「弁証法的形象」にそのモデルを見出す。従来の時間の流れをラディカルに否定し、「今」という時間の先端と太古を一致させようとするこの「歴史」意識は、ワイマール期の芸術や思想の至るところに見出すことができる。そこに生じる特異な時間からユートピアを現出させようという志向は、芸術という領域のみならず、保守革命からナチズムに至る政治の領域にまで浸透していると考えられる。本研究ではこの歴史ないし時間意識における美学と政治の重なりを、G・ベン、E・ユンガー、A・シュペーアの作品と思想から考察する。

## ３．研究の方法

(1) ナチズムの建築家アルベルト・シュペーアに関する資料を収集し、彼のデッサンや建築について調べ、とくに彼の「廃墟価値の理論(Ruinenwerttheorie)」について考察する。

(2) モダニズム美学について考察したK・H・ボーラーの *Plötzlichkeit*（『突然性』1981 年）を読み進めてモダニズム文学を「瞬間」と「ユートピア」という観点から捉えようとするその理論をまとめ、ベンヤミンの「弁証法的形象」をモデルに同時代の芸術の時間感覚を理解する可能性について考察する。

(3)エルンスト・ユンガーについて、歴史／時間意識という観点から、とくにナチズムへと傾倒していく 1930 年前後に書いたエッセイ群にみられる思考の特徴をまとめる。

(4) 上記（1）～（3）の調査と考察に基づいて、1920~30 年代に特徴的にみられた歴史／時間感覚を明らかにし、そこに政治と美学が相互浸透していった可能性について考察する。

## ４．研究成果

**(1)** K・H・ボーラーの著作 *Plötzlichkeit* の内容の解明

現代ドイツの美学者 K・H・ボーラーの「突然性」Plötzlichkeit という概念を明らかにすること、また彼の著書 *Plötzlichkeit* を批判的に読解することは、モダニズムと保守革命、ナチズムに共通する時間感覚という問題を考えるうえで、本研究がとくに注力した点である。なぜならば、彼は「突然性」という概念をベンヤミンの哲学思想から発想し、その観点からモダニズム文学、保守革命の思想、さらにはナチズムとの関係について論じているからである。研究期間に渡り取り組んだ内容は最終的に論文としてまとめ、今後発表される予定である（2020 年６月予定）。研究を通して明らかになった内容、そして得られた結論は以下である。

本研究でまず試みたのは、「突然性」概念が適用されうる芸術の歴史的射程、それを構成する要素、その系譜を説明することによってその意味内容をより明らかにすることである。続いて突然性とファシスト的イデオロギーとの関連性について考察した。ボーラーは突然性という概念の源のひとつとしてプレ・ファシズム思想としてしばしば名指される決断主義的思考を挙げている。しかしそこで明らかになったのは、あくまでもボーラーは突然性をそのようなプレ・ファシズム思想とは区別しようとしているということである。突然性とは美の属性であるとされてきた「現れ」や「仮象」の別名として解釈される。しかしながら、それは徹底的に刹那的で主観的、破壊的なものであるため、美的仮象が本来もっていた真理や救済やユートピアといった神学的・形而上学的含意を取り払われてしまうとボーラーは主張している。そのような突然性に基づく芸術は徹底的に自律的なものであるがゆえに、いかなる社会的、歴史的な文脈とも関係をもちえない。なぜなら、それらはけっきょくのところ歴史や連続的時間性を必要とするためである。ゆえに、ボーラーの目論見は、突然性に基づいた厳密な唯美主義を主張すること

で、ファシズムとの関連を疑われた唯美主義的モダニズムを救済することだといえる。しかしながら、ボーラーは他方でファシズムが突然性という時間と接点をもちえたことについても述べている。また、歴史を客観的に見るならば、破壊や無の美学である突然性がイデオロギーに占拠される可能性にも開かれ、実際にそのような反転が起きたことにも注意しなくてはならない。ユンガーの場合がそうであったように、突然性における無や破壊の衝動は、まだ見ぬ全体性への回帰願望と裏腹であった。そうした反転の可能性について考えてみることが重要である。

(2)アルベルト・シュペーアの時間／歴史感覚について

シュペーアについての一次文献および二次文献を多数収集し、それらを手がかりにしてシュペーアの建築のシュペーアが建築に関してもっていた独特な時間意識のあり方を、彼が唱えた「廃墟価値の理論」の内容を考察することから明らかにすることができた。そうした調査の過程で、シュペーアの廃墟をめぐる想像力との比較（とりわけユベール・ロベールやジョン・ソーンといった 18 世紀のピクチャレスクの芸術家における「未来完了型」廃墟への想像力との比較）の重要性が明らかになった。それとともに、ベンヤミンのアレゴリー論との対比の重要性もあらためて浮かび上がってきた。

初年時における以上の基礎的準備のもとに、さらに研究を進め、その成果を 2017 年６月 30 日～7 月 1 日にベルリン自由大学で開催されたワークショップ（神戸大学、立命館大学、ベルリン自由大学が参加したジョイントワークショップ Landscapes in Art, Theory, and Practice across Media, Time, and Place）にて発表した。さらに、その内容を発展させて論文としてまとめた。これについての研究をさらに英語論文としてもあらたにまとめて発表することができた。

以上の研究を通して明らかになったのは、シュペーアの建築における時間性の特殊性である。ナチスの建築家であるシュペーアはナチスの建築はローマやギリシアの遺構のように、何千年の後に廃墟になってもなお美しくあるように配慮して建てられねばならないと主張した。これがシュペーアの唱えた「廃墟価値の理論」である。この原則によってシュペーアは、いわば「未来の廃墟」を想像しながら多くのナチズム建築を造形した。彼の理論はこれまで 18～19 世紀に流行した廃墟の美学の亜流であると考えられてきた。しかしながら、シュペーアと同様、古典主義とロマン主義、廃墟の美学によってインスピレーションを得たイギリス新古典主義の建築家ジョン・ソーンと比較した場合、その違いは明白である。廃墟の持つ儚さと永遠性という二つの時間性のうち、ソーンにおいて強調されるのは前者であり、彼において顕著なのは予測不可能で偶然的な未来への意識とうつろいによって特徴づけられる時間への意識である。それに対し、同じく「未来完了型」の廃墟を志向しつつも、シュペーアの場合には永遠性という時間が志向されている。彼にとって未来の廃墟は、予測不可能な時間の経過を想像するロマンティシズムではなく、あくまでも「千年王国」と言われた第三帝国の持続の表象であった。両者の対称性はベンヤミンのアレゴリー論に照らしても理解される。しかしながら、シュペーアとナチズムにおける、未来という時間を物質主義的に管理し、そこに歴史を創造しようとするそのまなざしと企図のもとでは、現在において過去・現在・未来がひとつに重ね合わされることから他者を排除する「無時間性」といった様相が立ち現れる。シュペーアの建築に表れているのはその特殊な時間性であり、過去の廃墟美学における時間とは異質なものである。

(3) エルンスト・ユンガーにおける時間意識について

ユンガーについての研究は、K・H・ボーラーの美学の研究と並行的に進められた。ユンガーの著作、とくに初期の戦争を記述した著作において、突然性という美学が重要な意味を持っているということが明らかになった。彼が描く戦場における恐怖や未知なる出来事は一瞬の知覚によって経験されており、それらは美的な現象として受けとめられている。

(4) ボリス・グロイスの政治と芸術をめぐる理論について

この研究に関連する成果として、ボリス・グロイス著『アート・パワー』（現代企画室、2017 年）の翻訳も挙げられる。『アート・パワー』の主題のひとつは政治と芸術の結び目について考察することにある。この中にはヒトラーの芸術観について論じたものもある。この論考を訳すことで、ナチスの時間感覚について新たな見解を得ることができた。また、2016 年の国際美学会でグロイスの論について発表を行い、さらに「ボリス・グロイスにおけるアートと政治の交差について」という論考を研究誌に発表した。

以上(1)(2)(3)(4)を通して、1920～30 年代ドイツにおいて、モダニズム・保守革命・ナチズムがそれぞれ突然性ないし瞬間性といった歴史／時間感覚において接近しながらもなお相違点を有しているという

ことが明らかになった。またそうした時間感覚において美学と政治が交錯する可能性についても手がかりを得たが、これについては十分に明らかにできたとはいえないため、今後も引き続き研究課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>石田圭子 | ４．巻<br>50 |
| ２．論文標題<br>アルベルト・シュペーアの「廃墟価値の理論」をめぐって | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要 | ６．最初と最後の頁<br>1－29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>石田圭子 | ４．巻<br>50 |
| ２．論文標題<br>ボリス・グロイスにおけるアートと政治の交差について | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>国際文化学研究 | ６．最初と最後の頁<br>83-104 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>石田圭子 | ４．巻<br>1 |
| ２．論文標題<br>Albert Speer’s “Theory of Ruin Value” | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>Art Research Special Issue vol.1 Journal of Art Research Center, Ritsumeikan Univeristy | ６．最初と最後の頁<br>35-43 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>石田圭子 | ４．巻<br>256 |
| ２．論文標題<br>カール・ハインツ・ボーラーの「突然性（Ploetzlichkeit）」をめぐって | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>美学 | ６．最初と最後の頁<br>49-60 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>石田圭子 |
| ２．発表標題<br>On “ the New ”:Art and Politics in the Art Theory of Boris Groys |
| ３．学会等名<br>20th International Congress of Aesthetics（国際学会） |
| ４．発表年<br>2016年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>石田圭子 |
| ２．発表標題<br>カール・ハインツ・ボーラーの「突然性（Ploetzlichkeit）」をめぐって |
| ３．学会等名<br>第70回美学会全国大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| ・シンポジウム講演：アートにおける「美学の平等性」と「プロパガンダ」をめぐって（シンポジウム「アートと共同性　ボリス・グロイス日本招聘プロジェクト主催　於国立国際美術館）（2017年1月）<br>・翻訳（共訳）：ボリス・グロイス『アート・パワー』（現代企画室、2017年1月）<br>・国際ワークショップでの発表：On the Fascist Theory of Ruin Value（Joint Workshop of the Institute of Art History, FU Berlin, and the Faculty of Intercultural Studies, Kobe University）（於ベルリン自由大学、2017年6月） |

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|